

性感とはまた別に、今にも胴震いしたいほどのぞくぞく感が下半身を震わせている。ここへ来る前に飲んだ多量の水が、今このタイミングで尿意となって少年を苛<sup>さい</sup>んでいた。今までずっと気づかないふりをしてきたが、もう耐えられない。

「んう……っ♡あ…っ…、トイレ……、トイレいかせて……っ」

ついに雄茎から口を離し、涙目で男を見上げる。

状況を察したらしい男の目がメガネの奥で意地悪く眇<sup>すが</sup>められ、薄い口元がにやりと笑う。

「家畜に用を足す場所などあるものか。ここでしろ」

「ん” う……ッッ！♡」

そうして鎖をぐいッと引き、少年の頭を押さえつけてふたたび口淫をはじめさせる。メガネ男は神経質そうに見えて、少年の体液で自分の服や部屋が濡れることはまったく気にしていない。もしかしたら得意の魔術で、そのくらいのシミは一瞬で消せるのかもしれない。

「ン” んう…ッ♡♡ん” …ッ♡」